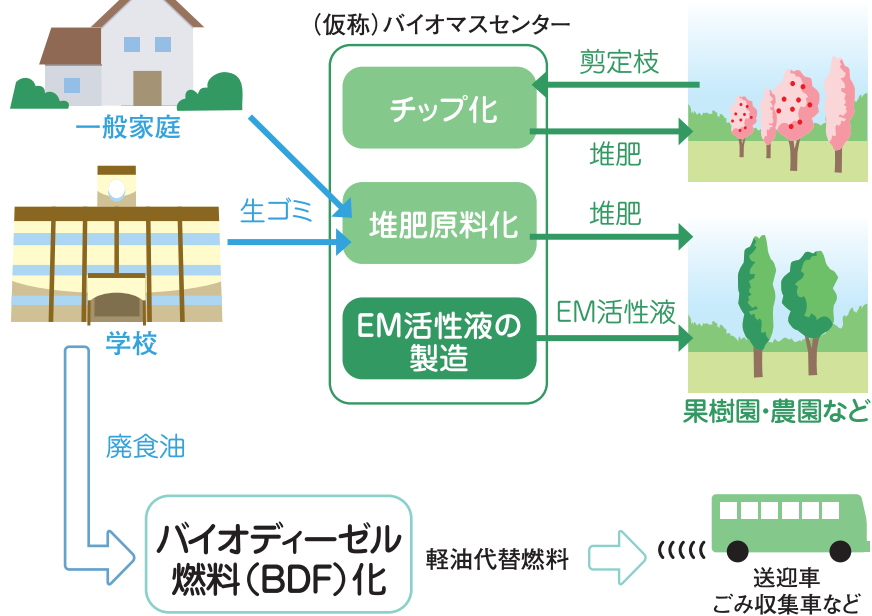


バイオスタウン構想に向けての試験導入  
(平成19年4月～21年3月)



【果樹の剪定枝も有効利用】

農家5軒による剪定枝粉碎機(チップパー)の共同購入へ補助金制度を導入し、112台の補助を行い、有効利用されています。

【大型処理機で生ごみを堆肥化】

学校給食は市内全校にEM活用による大型処理機(蘇生利器)を導入して堆肥化。一般家庭の生ごみもモデル地区300戸と団地1か所から収集・処理し、2年間で合計約95トン堆肥化。農家へ無償提供しています。

【3年間、試験的にEM活性液を無料配布】

平成19年から3年間の試験導入で農家への無料配布を行い、効果を実感してもらった結果、現在では需要に供給量が追いつかないほど好評です。EM活性液は週2回、大型培養装置(二千倍利器)で培養したものを、バイオマスセンターにて配布しています。

【古い食用油はごみ収集車の燃料に】

学校給食の廃食油は職員が回収。バイオディーゼル燃料に精製(8,000リットル/年)し、ごみ収集車の燃料にしています。

# 農と食と微生物を生かした 地域ぐるみで取り組む バイオマスの郷づくり

笛吹市は、石和(いさわ)温泉郷、そして桃やぶどうの有数の産地として知られる自然豊かな山梨県中央部の街。市では平成19年に国のバイオスタウン構想に公募し、家庭や学校などから出る生ゴミや、果樹園の剪定くずなどを堆肥や燃料にする長期にわたるプランを公表。平成19年からの試験導入には、EM技術が活用され、中心的な役割を果たしています。



バイオマスとは？

生物資源(bio)の量(mass)を表す概念。「再生可能な、生物由来の有機性資源で、化石資源を除いたもの」エネルギーやエコ資材などとして活用されます。

バイオマスセンターの運営を支える地域ネットワーク



梶野道雄さん(写真左)をはじめ、生ごみ堆肥化に携わるメンバーたち。機械で製造するといっても、EMは生き物、みなさんの真摯な気持ちが伝わるのか出来は素晴らしいものに。「これは『生ごみ堆肥』じゃなくて『スーパー堆肥』かな?」とにっこり。



毎週月・木にEM活性液の配布を手伝っている丸山泉さん。1回の配布は1トン前後で、毎回30人前後の農家の方が取りに来られるそうです。

EMを使用されている農家の方々の声



「EM歴は1年ぐらい、甘いトマトが収穫できていますよ」「桃と柿をつくってます。EMの活性液ともみ殻、油粕と米ぬかで20日ほど発酵させて秋に牛フンと一緒に土に入ります。あと、収穫の1カ月前に樹の周りにEM活性液を散布しますが、色と甘みがいいですよ」「生ごみ処理に利用してます。ニンニクに使用するとアブラムシも出てきません」「EMを使うと花が咲いてしまった大根でも食べられます。黒豆も大きくなりましたよ」と喜びの声がありました。



EMの使い方を指導する鮫谷陸雄さん



地元のEM実践農家・鮫谷陸雄さん(写真左)が10年以上にわたってEMで育てている桃やぶどうは品質の良さが評判。その実績を見込まれ、講師として笛吹市のEM学習会では徹底した利用方法を指導しています。

笛吹市長・荻野正直氏に  
聞く、理念と将来像



荻野正直 笛吹市長

美しい水のふるさとを取り戻すために  
「昔(こ)は40〜50m掘ると15度の冷たい水がわき出るほど水量も豊富でした。残念ながら今は深い所でないとい水は出ませんし、農薬や化学肥料による汚染も懸念されています。果樹栽培が始まっておよそ50年。汚染をもとに戻すのに100年以上はかかります」と、水と環境への強いこだわりを示す市長。笛吹市は笛吹川に沿って広がる平坦地を中心に、南北の丘陵・山岳地帯に挟まれた地域で、特に温泉資源と果樹農業を活かした観光産業が中心となっており、水環境を改善することは重要な課題となっています。  
有用な微生物を利用した  
環境保全型農業への取り組み  
市長がEMに興味を持ったのは、水路の清掃をボランティアで行った時のこと。「ヘドロが多く、藻も腐敗し、ひどい悪臭が

出ていましたが、EMを散布したところ臭いがすぐに消えたことに驚きました」。市長自身、農業を営まれていた経験から、水を浄化するためには有機資源の活用で化学肥料の多用を防ぎ、桃の連作障害抑制のために土壌消毒をしないで済むようにしたいと思っていたとか。だからこそ環境保全型農業を推進する必要性を感じ、有機農業に実績のあるEMによる生ごみ堆肥化とEM活性液配布事業の試験導入を実施するに至ったのです。  
「桃ぶどう日本の郷」を目指して、  
バイオスタウン構想を  
市では「桃ぶどう日本の郷」を目指して、平成19年度から果樹剪定枝のチップ化、家庭生ごみの堆肥資源化を推進。また、学校廃食油のバイオディーゼル燃料化を行うなど、「バイオスタウン構想」を策定しました。今後はEM技術の試験導入など従来の取り組みをベースに、新たな参加者を取り込むためにバイオマスセンターの整備などを計画し、平成26年の完成を目指しています。  
「この構想の実現により、微生物の活用を柱に、市全体でのバイオマス循環システムが構築され、環境保全型農業による農産物のブランド化、特色ある観光地づくり、住環境の整備など地域の活性化に役立てるようになりたい」と展望を語っていただきました。